二〇一五年度

普連土学園中学校　入学試験問題

二〇一五年　二月一日実施

国　語

一次

一、問題に答える時間は六十分です。

二、問題は、問題一　～　問題五　までであります。

三、答はすべて、「解答用紙」に記入しなさい。

四、「解答用紙」は中に二枚はさんであります。

問題一　次の文章を読み、後の問に答えなさい。

ところで、弱者を気づかうという思いやりは、日本の武士道にも西洋の騎士道にもあります。では日本の思いやりと西洋の思いやりの最大の違いは何でしょうか。

西洋文化の根底はキリスト教にあります。アメリカ合衆国にしても、もともと一六二〇年、英国からメイフラワー号に乗って渡ってきた百二名の*清教徒（ピルグリム・ファーザーズ）が、ここに神の国を造ろうとしたのが、建国のもとになったわけですから、①それは当然のことです。

第一章のはじめでも触れたように、キリスト教の基本は神と人間の契約で成り立っています。これを「契約思想」と言います。彼らが基づくのは聖書という紙に書いた契約です。

キリスト教をタテ軸にした思いやりは、人間が神の栄光体であると考えますから、簡単に言えば神様が喜ばないことは自分にも他人にもしてはいけないのです。そして、自分がしてほしいと思うことは人にもしてあげる。

「それで、何事でも、②自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。これが律法であり預言者なのです」（「マタイの福音書」7：12）

「あなたの隣人をあなた自身のように愛しなさい」（「マルコの福音書」12：31）

これらは聖書に書かれたキリスト教的な思いやりの考え方です。

キリスト教、つまり神の目というタテ軸がずっしりと心の軸として据えられ、それに照らして自分はこのことを喜びとし、あのことを悲しみとする。そうであるならば同じように神の創造物である目の前の相手にも自分とまったく同じ価値があり、やってほしいこと、やってほしくないことについては共通のものに違いないという考え方ができます。

だから、そこにキリスト教の神の目というタテ軸に照らして、やってよいことと、やってはいけないことという思いやりのタテ軸がどっしりと据わるわけです。

しかし一方で、この★が日常に入り込んだとたんに、すっかり形式化してその品格が落ちてしまい、契約一本槍になってしまうと、西洋人はときにはとんでもないことをする、と私は思います。

たとえばニューヨークに住んでいた頃、私はいつもあきれかえっていることがありました。それは美容院での仕事のやり方です。

「シャンプー係」の契約で雇われた人はシャンプーのみ。「カット係」で雇われた人はカットしかしません。ほかの人がどんなに忙しくても知らん顔です。契約外の仕事をするのは、人の仕事を奪うことになるし、自分の役ではないと、彼らは考えているのです。

郵便局も同じです。一番の窓口がパンク状態でも、二番の窓口の担当者はコーヒー片手に涼しい顔です。私はたまりかねて「何で手伝わないの？」と聞いたことがあります。③彼の答えは「それは僕の約束の仕事じゃないから」でした。

彼らのタテ軸に対する絶対視があまりに*偏狭になると、国家間の紛争を生み出す背景にもなります。イラク戦争などはその典型でしょう。自分たちの持っているタテ軸とは異なると判断すれば、「正義の名のもとに」と堂々と言って戦争まで引き起こすのです。

つまり彼らのタテ軸はかなり*狭量なものになっていることになります。

一方、日本人のタテ軸意識はどうでしょうか。神と人の契約という考え方こそないものの、前章でも触れたように、もともと日本人は大自然や神仏を敬い、そうしたものに反する行いはしないという軸をきちんと持っていました。

契約書などを必要としない分、こちらのほうが寛大で根強いとも言えるでしょう。だから④日本人は「正義」を振りかざしての戦争などはしないのです。

さらに、そのタテ軸に加えて、人と人との関係をとても大事にする集団主義文化というヨコ軸を持っている強みがあります。だから隣の人が忙しかったら、手が空いている人が手伝うのが日本流。ニューヨークでの美容院や郵便局のようなことは、普通起こりません。

集団主義文化はとくに戦後の日本において、中根千枝先生の『タテ社会の人間関係』『タテ社会の力学』（ともに講談社現代新書）などに見られるように、批判の対象にもなってきました。

よく批判されるのは、⑤「みんなと一緒」ということが一番の行動判断の軸になるという部分です。「赤信号、みんなで渡れば怖くない」という変なフレーズがありましたが、それは極端としても、みんなと同じように動き、同じように振る舞うこと。それが集団主義における規範でした。

なぜなら日本人がもっとも怖いのは、紙に書かれた法律で罰せられることよりも、自分の属している小集団の中で仲間外れになること、村八分を受けるという制裁だからです。

たとえばいまでは厳しく批判される*談合なども、集団主義の悪い例としてあげられています。でも弱い業者でも弱いなりに潰れないように、いささかの分け前が行くようにと共存を考えたのですから、悪いとはいえこれも日本流の思いやりの表れではあるのです。

いまでもよくニュースになる⑥組織ぐるみの*不祥事なども構造は似ています。薄々まずいだろうなとわかっていても、ヨコの関係に引きずられて泥沼にはまっていく。

しかしここにはやはり大きな間違いがあります。赤信号の例でも談合、不祥事でも、ヨコ軸のみでタテ軸がない。つまり何をやってよくて、何をやってはいけないかというときの判断の基準となる軸がないのです。

集団主義文化が悪いものだとは決して私は思いません。しかしそこにタテ軸がないと結局ヨコの関係だけに流されてうまくいかないのです。

昔の日本人は、何か悪いことをすると「お天道様に申し訳ない」と口にしてきました。お天道様に申し訳ないというのは人間界を高いところから見ている神仏の力があるという意識の反映でしょう。つまり私たちの意識の中に、もともとタテ軸はあったのです。

人間の小さな業を超えた大きな見えざる手、神仏の目を感じていた日本人がそこにたしかにいました。これをタテ軸とする一方で、人間同士の人づきあい、「面子」や「ご縁」「ご近所づきあい」などの人のつながりをヨコ軸として日本流の思いやりは強力な二つの軸で構成されていたのです。

これが⑦西洋の思いやりと日本の思いやりの最大の違いです。

西洋の、紙に書いた神と人の契約がベースになっているタテ軸中心の思いやりよりも、その意味では日本人の思いやりのほうが、いわばＤＮＡによって長年継承されてきた思いやりであり、その分はるかに根強いと言えるかもしれません。

もしも私たちがこのことをもう一度はっきりと認識し、行動の中に思いやりのタテ軸とヨコ軸をドシンと据えたら、新しい日本人の思いやりとして世界にも誇れるものとなるでしょう。

（佐藤　綾子『思いやりの日本人』　講談社現代新書）

〈注〉＊清教徒……キリスト教の一派。
＊偏狭……心が狭(せま)く、他の意見などを受け入れないこと。度量の小さいこと。狭量。
＊狭量……度量が狭いこと。心が狭いさま。
＊談合……公正な価格を害したり、不正の利益を得たりする目的で、競売や入札の競争者が予め互(たが)いに相談すること。
＊不祥事……名誉(よ)を損なうようなよくないこと。

問一　――線部①「それは当然のことです」とありますが、何が「当然」なのですか。説明しなさい。

問二　――線部②「自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい」とありますが、これはどのような考え方から生まれたものですか。この考え方を本文中から七十字前後で抜(ぬ)き出し、最初と最後のそれぞれ五字を答えなさい。

問三　本文中の［★］に入る言葉を、本文中から四字で抜き出して答えなさい。

問四　――線部③「彼の答えは『それは僕の約束の仕事じゃないから』でした」とありますが、「彼」がこのように答えた理由として、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　どの窓口かによって仕事の大変さや量は異なっていて、たまたま今の時間帯はほかの窓口が忙しいだけで、自分の窓口が忙しい時もあるから。

イ　ほかの窓口の仕事なのに自分が手伝ってしまうとその担当の人の仕事を奪ってしまうことになるし、本来自分のするべき仕事ではないから。

ウ　責任のある立場の人から頼(たの)まれれば喜んで手伝うが、正式に手伝いを依頼(いらい)されてもいないのに、ほかの人の仕事を手伝うのは抵抗(ていこう)があるから。

エ　契約書によって仕事の内容は予め決められているのだから、決められた業務以外の仕事を無断で担当してはいけない決まりになっているから。

オ　その人の能力や適性に応じて仕事が配分されているので、担当者以外の人ではその仕事を充分(じゅう)に果たすことができないから。

問五　――線部④「日本人は『正義』を振りかざしての戦争などはしないのです」とありますが、それはなぜですか。「日本人のタテ軸」がどのようなものであるかを明らかにして説明しなさい。

問六　――線部⑤「『みんなと一緒』ということが一番の行動判断の軸になる」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。

問七　――線部⑥「組織ぐるみの不祥事」とありますが、こうしたことが起きる理由について説明したものとして、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　集団主義文化というヨコの関係だけに流されてしまい、何をやってよいか悪いかというタテ軸が忘れ去られてしまったから。

イ　日本流の思いやりというヨコの関係に支配されることで、やってよいことと悪いことの区別というタテの関係がかえって強化されてしまったから。

ウ　善悪の判断の基準となるタテ軸はしっかりとあるものの、皆と同じように振る舞うという行動の規範となるヨコ軸に流されてしまったから。

エ　何をやってよいか悪いかという基準のタテ軸が崩（くず）れると同時に、「みんなと一緒」という行動判断のヨコ軸までもが崩れてしまったから。

オ　人間存在を超える神仏の目というタテ軸を中心にして、人とのつながりを大切にするヨコ軸までもが必要以上に機能するようになってしまったから。

問八　――線部⑦「西洋の思いやりと日本の思いやりの最大の違い」とありますが、それはどのようなものですか。説明しなさい。

問題二　次の文章を読み、後の問に答えなさい。

光平はクラスのリレーの選手に選ばれたが、練習の厳しさに音を上げ、「やめたい」と言い出した。習い事を始めても長続きせず、気弱なところがある光平に、母親である「私」は、自分が小学校四年生だったころの思い出を話し始める。

〝南小〟に転校してきた「私」は、「晶子」に「私が仲良くしてあげる」と声をかけられる。「晶子」は「私」が住む家の大家（持ち主）の子どもであった。

次の日の放課後、「うちに遊びにおいで」と、晶子に誘われた。晶子の家は、長い塀に囲まれ、庭には白壁の蔵がある立派な屋敷だった。門を潜るときに気後れした。

晶子は何でも持っていた。リカちゃん人形をはじめ、当時流行っていたおもちゃが部屋中に転がっていた。そんな中で、私が一番羨ましく思ったのは、黒光りをしたアップライトのピアノだった。

「本当は、グランドピアノがほしかったんだ。でも今は、こんなので我慢してる」晶子はそう言うと、ピアノの脚を爪先で蹴った。

晶子にとっては不満のピアノだったのだろうが、私はその鍵盤に触れたとき、両親にはすまないと思いつつ自分の境遇を呪った。

それから一週間、二週間とつきあう内、晶子は次第に意地の悪さを発揮し始めた。

「美代ちゃん、このお人形貸してあげる」と、自分から私に押し付けながら、私が遊び始めると「それ、私のよ。早く返して」と怒鳴り、仕舞いには「泥棒」とまで言った。

あるときは、「ピアノ弾く？」と尋ねられ「うん」と答えると鍵盤の蓋を閉められた。

晶子はあきらかに私が悲しむ顔を見て楽しんでいる様子だった。きっと生身の反応がある私は、どんなおもちゃより、晶子にとって最高のおもちゃだったに違いない。

最初は人形にもピアノにも触れたい一心で、自己嫌悪を感じながらも媚びるところがあった。が、さすがに、そんなこと

が一ヶ月も続けば完全に厭気が差す。私は次第に晶子を遠ざけようとした。

「遊ぼう」と誘われても「用事があるから」と断った。勿論、そのたびに厭味を言われた。

五年生になるとクラス替えがあった。幸いにして晶子と一緒の教室にいたのは三ヶ月で済んだ。始業式の日、掲示板に貼られた三組の名簿の中に晶子の名がなかったとき、①背負っていたランドセルが急に軽くなった気がした。

それでも、同じ校内にはいる。すべての憂鬱が解消したわけではなかった。私の下駄箱に「くさいうわばき」という貼り紙をした犯人は晶子だったに違いない。

女の子の親しい友達もできたが、同性に対しての見栄も生まれてくる年頃だった。だからなのだろう、私は意識的に女の子らしい遊びをせずに、男の子とばかり遊ぶようになった。元々は活発な私だ。ソフトボールなんかは、なまじの男の子より上手く、チーム分けをするときには、引っ張りだこになった。そういうイメージが定着すれば、人形やママゴトセットに嫉妬しなくて済む。たぶん、自分の劣等感を紛らわす防衛本能だったのかもしれない。

が、表で遊んでいたせいで、私の顔は日に焼け、真っ黒になった。そんな様子を「真っ黒けのけ」と、当時流行ったボールペンのＣＭソングをもじられ晶子にからかわれた。

南小へ転校して初めての運動会。運動会は毎年、私にとっての晴れ舞台だった。

私は三組のリレー選手に選ばれた。晶子も一組の選手になり、共にアンカーを務め、競うことになった。しかも、学年の五クラスの間では一組と三組が二強と見られていた。

運動会本番の前々日、全体の予行演習を行う。勿論、リレーの練習も本番さながらに行われた。

「五年生女子のリレーに出場する選手の方は集合場所に集まってください」

放送委員がアナウンスする声が、ハウリングを起こすスピーカーから聞こえた。

集合場所で列に並んだとき、自分の薄汚れた見窄らしい＊ズックが気になり、すぐに裸足になった。それを晶子は目敏く見つけ「ふん、靴も買ってもらえない子がいる」と、鼻で笑った。

北小に通っていた頃、「ごめんね、美代子」と、毎年、母がすまなそうに謝る言葉に「ううん、全然平気だよ。それに新しい靴なんて履いたら、足にマメができるだけだもん。私ね、裸足の女王って言われてるんだから」と、②精一杯の嘘をつ

いたことを思い出した。
「位置について、よーい」
パンッ。ピストルの音でリレーは始まった。走る距離は一人一周だ。練習といえども、各、クラスの大声援が校庭を埋め尽くす。
予想通り、一組と三組のマッチレースになった。一組が先頭で、アンカーの晶子にバトンが渡った。私は二番手でバトンを受け取り、前を行く晶子の背中を追った。私の身体はバネになったように地面を蹴り、半周付近で晶子を捕らえ、並んだ。人の顔色を窺うほどの余裕はないのに、何故か、必死に顔を歪ませる晶子が分かった。と、晶子の身体が私の走路を邪魔するように入り込んできた。私は身体をひょいと捩じ曲げ、それを難なく躱すと、晶子を抜き去った。
「おお」という歓声とどよめきが聞こえた。
そのまま一気にテープを切った。
その瞬間、背後でどさっと崩れてゆく影を感じた。
私は膝に両手を当て「はぁはぁ」と荒い息をつきながら、その方向を見ると、晶子が前のめりに倒れていた。その脇を後続のランナーが次々に抜き去る。晶子は半ベソをかきながら、よろよろと起き上がると、歩いたままゴールに入った。その顔を見ると、ラインを引いた石灰の粉が顔一面に付いていた。
「おい、見ろよ、あいつの顔。ありゃあ、おかめのお面だ」
ひとりの男子が、晶子を指差してそうからかうと、どっと笑いが起こった。子どもは残酷で思ったことを口にする。本来なら憐れに思う場面なのかもしれないが、私の心の中にはっきりとした★が生まれていた。
その日、リレーのメンバー、朋ちゃん、日登美ちゃん、よっちゃんと一緒に帰った。
「晶子、ちょっといい気味だったと思わない？」日登美ちゃんが切り出す。
「あの顔、笑えた」朋ちゃんがすぐに反応した。
「私さぁ、幼稚園のとき、晶子にクレヨン全部折られてさぁ」日登美ちゃんが言う。
「私、トイレに閉じ込められたことがある」よっちゃんが怒る。
晶子から受けた仕打ちを仲間が口々に言い出すと、ほっとする思いがした。

……私だけじゃなかったんだ。
「だから、一組だけには負けたくないよね」
「うんうん」
さながら、被害者の会だ。皮肉なものだが、③妙なことで四人の中に連帯感が生まれ結束した。
……中略……
その晩、迷惑な訪問者が現れた。
「ごめんください」のひと言もなく、玄関の引き戸は開けられた。
キキキキッ。
その音に家族全員が驚きながら玄関へと視線を送る。そこには、晶子と晶子の母親が、既に入り込んでいた。
両親が立ち上がり、すぐに対応する。
「あ、村上さんの奥さん。何か？」
「何かじゃないわよっ。うちの子、おたくの美代ちゃんにケガさせられたのっ」
その怒鳴り声にもびっくりしたが、私がケガをさせたという身に覚えのないことに身体が硬直した。両親は振り返り、私を見た。
「今日、運動会の練習で、うちの子にわざと足を掛けて転ばせたっていうじゃないのっ。一体、どんな教育してるの、おたくはっ」
晶子を見ると、④その膝には大袈裟な包帯が幾重にも巻かれていた。
「晶子の友達だと思ってたから、何かにつけ一緒に遊ばせてあげたのに、まぁこんなことされたんじゃたまんないわっ」
「美代子……」父が私を見つめた。
私はただ黙って身を縮めた。「違う」と反論すれば火に油を注ぐようなものだと感じたからだ。
「原田さんの紹介だったから、他の借り手を断ってまで貸してあげたのに、ホント、恩を仇で返すってこういうことよ。今度こんなことしたら出てってもらわなくちゃねっ」
晶子の母親は踵を返しながら、捨て台詞のように吐いた。

キキキキッ、ピシャ。
引き戸が閉まった後、しばらくの間、静寂に包まれた。家族みんな、唖然として声が出なかったのだろう。
最初に口を開いたのは兄で「何なんだ、あのおばさん」と、忌々しそうに言った。それに続くように姉が「ばっかじゃないの」と首を捻った。
「やめなさい」母がふたりを窘める。
父は「ふぅ」と、気を鎮めるように大きく息を吐き、私に向かって「そんなことしたのか？」と、改めて聞き直した。
「ううん、してない。晶子ちゃんは自分で転んだ。ホントだよ、みんな知ってる、ホントだって」私はそう言いながら、⑤溢れてくる涙を手の甲で拭った。
私はてっきり叱られるものだと覚悟していたが、父は「そうか、もう分かったから……。泣くな」と、私の頭を撫でた。私はほっとした気持ちと、親が信じてくれたという想いに、声をあげて泣いた。
その夜、兄弟と並んで入った布団の中で、私は寝付かれなかった。リレーで晶子を負かせば、きっとまた難癖をつけられる。そうしたらうちの家族はここから追い出されるに違いない。あの晩の私の頭の中には、路頭に迷う一家の図が渦巻いていた。
私のせいで……。
……中略……
初めての運動会を楽しみにしていた弟が、家の中をバタバタと走り回る足音がする。
「美代子、起きなさい」と、母が私を起こしにきた。
「母さん、私、おなか痛い」そんな嘘が咄嗟に口から出てしまった。
「いいから早く、支度しなさい」
母には、仮病だと分かっていたに違いない。
仕方なく布団から抜け出すと、枕元には真っ白な運動着と赤いハチマキがきちんと畳んで置いてあった。
着替えて、朝食の用意された卓袱台に着くと、両親と姉弟がみんな私を待っている様子だった。
私はひと言も喋らず俯いていた。

と、父がゆっくりとした口調で「美代子、⑥この間のことなら気にすることはないぞ」と、話し掛けてきた。
「うん？」
私は目を擦りながら、父親の言う意味を理解しようとした。
「この家のことなら、何も心配することはない。父さんは、自分の子が侮辱されてまで他人に媚びへつらうのはイヤだ。父さんは無学だけど、そういうことは分かる。貧乏人だからって恥じる気もない。出て行けって言うなら出ればいい。それだけだ。だから、お前は何も気にせず思いっきり走れ」父は目を細めて穏やかな笑顔で言った。
「父さん……」
「それから、これ」
父は卓袱台の下から紙袋を取り出すと私に渡した。
「うん？」
「開けてみろ」
私は急いで袋を開けた。そこには真っ白なズックがあった。
「安もんでごめんね」と、母が謝った。
⑦私は大きく頭を振った。
横から覗く弟が「いいなぁ、僕のは？」と、訊く。
「お前は、今日、一等賞になったら」姉がふざけてからかう。
「ちぇー」と、不満を漏らす弟を父は自分の膝の上に乗せた。
「美代子は、とにかく頑張れ」父はそう言って何度も頷いた。
「ありがとう……」それ以上は言葉にならなかった。同時に、仮病まで使って逃げてしまおうと考えた自分が恥ずかしくなった。
と、キキキキッと音を立て玄関が開いた。兄が息を切らしながら勢いよく駆け込んできた。
「おお、間に合ったか。美代子、ほら、*幻のカラスウリだ」
兄の手のひらには橙色の実がたくさん載っていた。〝裏山〟まで自転車を飛ばし、採りに行ってくれたのだった。

「兄ちゃん、僕には？」弟が兄に駆け寄る。
「ああ、お前の分もある」
「やったぁ」弟がはしゃぐ。
「美代子、いいか。これ塗って、絶対負けんなよ。負けたらぶっとばすからな」
荒っぽい言い方だが、触れた兄の手は温かかった。
「兄ちゃん、ありがとう」涙が止まらなくなった。

「……」
光平に語り掛けていた昔話に、目頭が熱くなり、気づくと私は言葉を失くし、しばらく黙り込んでいた。
ザブーン。
お湯の溢れ出る音がすると、風呂場のドアが少し開いた。息子はその隙間から半分顔を覗かせて「で、結局どうなったんだよ、その後？」と、訊いてきた。
「うん？」私は慌てて洟を啜った。
「だから、お母さんはその厭なやつに勝ったのかってこと」
私はひと呼吸置いて「当たり前でしょう。家族みんなの想いが追い風になってるのよ。負けるわけないじゃない。もう、ぶっちぎりよ、ふふふ」と、笑って返した。
一着でゴールした私は大歓声に包まれた。メンバーと肩を抱き合い喜びながら、目は両親の姿を探した。家族が私に手を振っているのが分かった。
「へー、やるじゃん。で、そいつ、へコんだ？」
お伽話なら、万事めでたしめでたしというところなのだろうが、その程度のことで晶子の捩じ曲がった性格が直るはずもない。その後も相変わらずの〝晶子ぶり〟を発揮し、私にもちょっかいを出してきたが、⑧受け止める私の方に余裕があった。どうでもいい存在になっていた。
「何事も気持ちの持ち様よ。だから、あんたもやめるとかやめないとかグダグダ言ってないで、ガツンとぶっちぎっちゃい

なさいよ」
　もしあのとき逃げていたら、私は一体どんな私になっていただろう？
「お母さん、光平がやる気になるなら、何でもしてあげる」
「うーん、じゃあ、とりあえず新しいシューズ買ってくれる？」
「まっ、ホント現金なんだから。いいわよ、買ってあげる。ナイキでもアディダスでも、好きなものをね」
「うへへ。やったぜ」
「でもね、ひとつ言っておくけど、その靴は逃げ足に履かせるための靴じゃないからね」
「うん。分かってるって」
「お父さんの分まで見届けてあげるから、しっかりね。ホント、頼むわよ」
「あ、そうだ、ビデオ撮るとき、あんまり出しゃばるなよな、恥ずかしいし」
「何が恥ずかしいのよ、親が息子を応援するのに。そんなこと言ってたら最前列で〝行けーっ、光平っ〟て叫んでやるから」
「ひえー、ウザい」
「ウザいって、こらっ」
　私は立ち上がり、手にしたバスタオルを投げつける真似をした。
「おっと」
　息子は慌ててドアを閉め、浴室に大声を響かせて笑った。
「残念でした、ははは」
「こらっ」
　⑨少しは分かってもらえたのかしら……？
　脱衣所から出ようとすると「お母さん」と、呼び止められた。
「はい？」
「オレさぁ……」

「何？」
「オレ……オレさ、ぶっちぎってみせるからさ」
一度冷めかけた目頭がまた熱くなった。目を閉じて上を向くと、雲ひとつなく晴れ渡った十月の青空にたなびく万国旗が見え、そのはためく音までしっかりと聞こえてきた。

（森　浩美「晴天の万国旗」『こちらの事情』　双葉文庫）

〈注〉＊ズック……運動靴のこと。
＊幻のカラスウリ……「カラスウリ」は山野に自生するつる草の植物。小さな俵型の実をつける。この物語では、子どもたちの間で、〝裏山〟と呼ばれる町外れの雑木林に自生している「カラスウリ」の粘り気のある種をふくらはぎに塗ると、足が速くなるという噂があった。

問一　――線部①「背負っていたランドセルが急に軽くなった気がした」とありますが、そのように感じたのはなぜですか。説明しなさい。
問二　――線部②「精一杯の嘘をついた」とありますが、それはなぜですか。説明しなさい。
問三　本文中の［★］に入る最も適当な言葉を次のア～オから選び、記号で答えなさい。
ア　罪悪感　　イ　達成感　　ウ　危機感　　エ　優越感　　オ　責任感
問四　――線部③「妙なことで四人の中に連帯感が生まれ結束した」とありますが、なぜ「四人の中に連帯感が生まれた」のですか。説明しなさい。
問五　――線部④「その膝には大袈裟な包帯が幾重にも巻かれていた」とありますが、包帯が「大袈裟」に巻かれていたのはなぜですか。説明しなさい。

問六　――線部⑤「溢れてくる涙を手の甲で拭った」とありますが、このときの「私」の気持ちとして、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　自分と晶子の間で解決できる問題であったのに晶子の母親が出てきたことにとまどい、自分の父がその話を聞いて自分を責める側になったことを無念に思っている。

イ　人の家に乗り込んでくる不作法に対していきどおっているが、その一方で自分が秘密にしていたいことを暴かれるのではないかと心配している。

ウ　一方的に責められるばかりで自分の言い分が父にも受け入れられない雰囲気を感じつつ、けがのことを自分のせいにする晶子とその母親のやり方に怒りを覚えている。

エ　いつも自分中心の晶子のことをうとましく思うと同時に、母親をいとも簡単に味方に付けることが出来る家庭環境をうらやんでいる。

オ　身に覚えのないことで責められたことをくやしく思い、自分がそんなひどいことをしたと家族に誤解されたかもしれないと悲しく思っている。

問七　――線部⑥「この間のことなら気にすることはないぞ」とありますが、この時「父」は、「私」が何を気にしていると思っているのですか。次の文の空欄に合うように答えなさい。

「私」が［　　］を気にしていると思っている。

問八　――線部⑦「私は大きく頭を振った」とありますが、この時の「私」の心情として最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　両親に迷惑をかけまいと頑張ってきた自分へのご褒美なのだと思うが、素直には受け入れられないと思っている。

イ　新しいズックを「安物」と言った母親に、本当は高価なものだと知っていることを伝えようとしている。

ウ　自分に期待してくれている両親に対して、買ってもらった新しいズックを履いて必ず優勝しようと心に誓っている。

エ　自分のことを思いやり、無理をして新しいズックを買ってくれた両親に対して、感謝と申し訳なさを感じている。

オ　父親の言葉と、新しいズックをもらえたことに、幸せな気持ちで胸がいっぱいになっている。

問九　――線部⑧「受け止める私に余裕があった。どうでもいい存在になっていた」とありますが、「晶子」のことを、「私」はどうして「どうでもいい存在」と思うようになったと考えられますか。次の文の空欄に入る言葉を、本文中から八字で抜き出して答えなさい。

「私」は［　　］に支えられていることに気づき、晶子のいやがらせなど気にならなくなったから。

問十　――線部⑨「少しは分かってもらえたのかしら……？」とありますが、この時「私」が「光平」に分かってもらいたかったこととして、最も適当なものを次のア～オから選び、記号で答えなさい。

ア　頑張っている姿を見ている人は必ずいるから、つらくても逃げずに挑戦すれば褒美がもらえることもあるのだ、ということ。

イ　あきらめずに強く望めば、望んだものは必ず手に入り、心配ごとは時間が経てば自然と解決に向かっていくものだ、ということ。

ウ　どんなに辛い時でも、見守ってくれる人が自分の近くに必ずいるのだから、迷わずに一生懸命取り組めばよいのだ、ということ。

エ　実力を発揮できるかどうかは気持ちの問題なのだから、落ち込んだ時は母親である自分にきちんと相談するようにしてほしい、ということ。

オ　一人の力では物事を進めることはとても難しいのだが、応援する人がいることでいつも以上の力が発揮できるのだ、ということ。

問題三

次の①～⑩の――線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなにそれぞれ直しなさい。

① 車の運転中は少しの油断がヒゲキを生む。
② X線をショウシャして胸部のレントゲン写真を撮(と)る。
③ 暴風雨のギジ体験をすることができる。
④ ジュースで野菜不足をオギナう。
⑤ うちの子はニュウシが生えそろったばかりだ。
⑥ 養蚕農家の仕事は大変だ。
⑦ 万全の準備をして試験に臨みなさい。
⑧ うっかり墓穴を掘(ほ)ってしまった。
⑨ 沿岸部に波浪(ろう)注意報が発令されている。
⑩ 街はすっかり春の装いだ。

問題四

ことばは、ひとつの語に対してひとつの意味だけでなく、いくつもの意味がある場合が多く見られます。例を見ると、「もつ」という語には、「その状態を保ち続ける」という意味と、「性質や能力を身にそなえる」という意味があることが分かります。

次の①～⑩について、二つの（　　）に同じ語を入れ、それぞれふさわしい意味になるよう、例にならってひらがなで答えなさい。

【例】「二人の友情は、よく二十年も（　　）ているね。よく彼の尊大さに我慢できるものだよ。」
「彼女は本当に寛容な心を（　　）ているからね。彼がいばっていられるのも彼女の心の広さのおかげだよ。」

⬇　（答）「もっ」

①「調子に（　　）のもいい加減にしなさい。遅くまでテレビを見ていると、また寝坊するわよ。」
「お母さんの好きな俳優が出ているよ！　はやく来て一緒に見よう。」
「その手には（　　）ものですか。はやく寝なさい。」

②「どうせ、組み立て直せないなら、最初から（　　）ないほうがよかったのに。お父さんの大切なものなんだよ。」
「どうしようお兄ちゃん。お父さんに（　　）ないで！」

③「あなたの熱心さは語り草になっています。いまだによく（　　）ていますよ。」
「先生は厳しかったけれど、あの授業で算数のおもしろさを（　　）たんだと思います。」

④「負けました。足を（　　）れて倒されてしまいました。」
「上体にばかり神経がいってしまったんだな。最後まで、全身に注意を（　　）ないと勝てないぞ。」

⑤「いや、銀行を背にして、左に（　　）ないと目的地に着かないよ。」
「ぼくは直進だと言ったんだけど、どうしても彼が（　　）ないから彼の言う通りに行ったら、案の定迷ったよ。」

⑥「先ほどよりも、息苦しさを言い（　　）ていらっしゃるようです。お医者様はまだですか。」
「医者が会場にいないかと先ほどから放送で（　　）ているが、名乗りでる人がいないんだ。」

⑦「こら、松葉づえを刀に（　　）てふりまわすな。ちゃんと松葉づえをついていなくてはだめだろ。」
「平気だよ。」
「医者はどういう症状だと（　　）たんだ？　捻挫か？　靭帯やアキレス腱でも痛めていたら大変だぞ。」

⑧「相手チームの陣地を（　　）作戦を今から皆さんに伝達します！」
「いやいや、声が大きいよ。もっと声を（　　）ように言ってください。」

⑨「犯人の目星は（　　）たのでしょう？　この警備はちょっと大げさではないかな。人件費もかかるのだし。」
「いえ、油断は禁物です。護衛にはこのまま（　　）てもらいます。」

⑩「このジュース、本当に果汁100％なの？　水で（　　）たみたいに薄いよ。どこの売り場に置いてあったの？」
「値段が100円を（　　）ているコーナーから持ってきたんだけど。」

問題五

次の①～⑤のことわざの意味として最も適当なものを後のA群から選び、記号で答えなさい。
また、①～⑤とほぼ反対の意味になることわざを後のB群から選び、番号で答えなさい。

① 人を見たら泥棒と思え　② せいては事を仕損じる
③ 坊主憎けりゃ袈裟まで憎い　④ 好きこそものの上手なれ
⑤ あとは野となれ山となれ

［A群］
ア 他人を簡単に信用してはならない。
イ 好きなものは上達が早い。
ウ うそが平気な人は、いずれ泥棒も平気になる。
エ 一つ気に障ると、それが関係するものすべてが嫌になる。
オ ものごとはとかく繰り返されるものだ。
カ 目の前のことがすめば、後はどうなってもかまわない。
キ あせると失敗しやすい。

［B群］
1 立つ鳥あとをにごさず　2 うそも方便　3 三度目の正直
4 あばたもえくぼ　5 下手の横好き　6 渡る世間に鬼はなし
7 善は急げ